

宗教政策と宗教文化に関する
JSPS 科研費海外調査報告 (2012 年度～2013 年度)

川田 進

工学部 総合人間学系教室

(2015 年 9 月 30 日受理)

Overseas Research Report on Religious Policies and Religious Culture
under JSPS Grant-in-Aid for Scientific Research (from fiscal 2012 to 2013)

by

Susumu KAWATA

Department of Human Sciences,

Faculty of Engineering

(Manuscript received September 30, 2015)

Abstract

The purpose of this paper is to report on the results of an overseas field research and a literature research on religious policies and religious culture. The researches were conducted to carry out two projects under a JSPS grant-in-aid for scientific research. The titles of the researches are *Research on "the Structure of Religious Conflicts" and "the Formation of Religious Networks" in Eastern Tibet* (Susumu Kawata, Project Number: 24510361) and *Comparative Sociological Research on Religious Diversification and Religious Policies in East Asia* (Yoshihide Sakurai, Project Number: 25301037). The researches were conducted in fiscal 2012 to 2013, mainly in Garzê (甘孜) Tibetan Autonomous Prefecture of Sichuan Province, Yulshul (玉樹) Tibetan Autonomous Prefecture of Qinghai Province, and Xinjiang Uyghur Autonomous Region.

キーワード ; 宗教政策, 宗教文化, チベット仏教, イスラーム, 中国共産党, 宗教ツーリズム

Keyword: religious policy, religious culture, Tibetan Buddhism, Islam, Chinese Communist Party,
religious tourism

1. はじめに

本報告は2種類のJSPS（日本学術振興会）科学研究費補助金研究課題に関わる海外調査記録及び考察である。先ず研究課題名を以下に示す。

- (1)「東チベットにおける『宗教紛争の構造』と『宗教ネットワークの形成』に関する研究」基盤研究C, 課題番号:24510361, 代表者:川田進, 2012年度～2015年度。以下, 川田科研と略す。
- (2)「東アジアにおける宗教多元化と宗教政策の比較社会的な研究」基盤研究B(海外学術調査), 課題番号:25301037, 代表者:櫻井義秀(北海道大学文学研究科教授), 2013年度～2015年度。以下, 櫻井科研と略す。

川田科研のキーワードは宗教紛争, 宗教政策, 宗教ネットワークであり, 調査拠点は主にチベット高原の東部(四川, 青海, 甘肅, 雲南各省内のチベット人居住地区)であるが, チベットの宗教紛争を考える上で, 新疆ウイグル自治区における民族と宗教の問題(いわゆるウイグル問題)と比較することは大きな意味を持つ。そこで2013年にウイグル問題に関する予備調査を行った。

櫻井科研のキーワードは宗教多元化と宗教政策であり, 調査拠点は中国, 台湾, 香港, モンゴル, 韓国, タイ等, 広範囲に及んでいる。研究代表者及び6名の分担者が各地域を受け持ち, 研究課題のテーマに沿って宗教調査を進めた。川田は主にチベット仏教と中国イスラームを担当した。

両科研は宗教政策を共通項とし, 宗教ネットワークや宗教多元化等, 相互に関連する概念を有している。本報告が二つの研究課題を扱う理由はそこにある。終了年度はともに2015年度であるが, 本報告では2013年度末までを対象とし, 残りの年度については別の機会に報告する。

2012年度と2013年度に実施した調査地点を次に掲げるが, 本報告では中華人民共和国内の調査のみを対象とし, ネパールのカトマンズ調査については別の報告を準備する。

- (a)2012年8月 四川省定康県, 甘孜県, 白玉県, 色達県, 馬爾康県(中国, 川田科研)
- (b)2013年8月 カトマンズ(ネパール, 川田科研)
- (c)2013年8月 青海省西寧市, 玉樹市, 囊謙県, 雜多県(中国, 櫻井科研)
- (d)2013年10月 新疆ウイグル自治区ウルムチ市, ヤル

カンド県, インギサル県, カシュガル市(中国, 川田科研)

(c)(d)は予備調査(初回調査), (a)は継続調査(過去に実施した調査を継続)である。(a)を除き, すべて単独で実施した。

本報告が扱う中国民族地区に関して, 大事記, 地理, 経済, 政治, 文化, 社会等の基礎的なデータは地方誌(各種「県志」「市志」「州志」等)から得られる。しかし, 中国共産党の宗教政策及び各地方政府の宗教管理の実状は, 中国では「政治的に敏感な問題」と見なされ, 通常非公開である。それゆえ, とりわけ民族地区内における仏教寺院, イスラームのモスク, カトリック教会等の宗教管理を把握するには, 複数回にわたる現地調査と定点観測が不可欠である。

昨今, 日本を含む外国の研究者や評論家がチベットやウイグルの民族問題, 宗教問題に対して, 一次資料や現地調査を踏まえず安易に批評・論評を行う傾向が見られる。筆者はこのような伝聞や推測に基づく意見発表を好ましいとは考えない。

本報告が持つ学術的意義は, 筆者が行った聞き取り調査や参与観察の結果を文字と写真で記録することである。ヤチェン修行地やラルン五明仏学院等, 過去に行った定点観測と比較する際に, 今回の調査は重要な資料となる。予備調査の内容を公表する目的は, 今後の調査を継続するにあたっての論点整理と記録保存である。固有名詞の中で, チベット語音やウイグル語音が調査不明のものは, 漢語表記に留めた。

なお, 本報告内の記述は, 拙著『東チベットの宗教空間』[川田2015]と一部重複することを断っておく。

2. 四川省甘孜チベット族自治州調査行程

2012年

- 8月16日 大阪から四川省成都市へ移動
- 8月17日 成都市から康定県へ移動
- 8月18日 康定県から甘孜県へ移動
- 8月19日 甘孜県から白玉県へ移動
ヤチェン修行地で調査
- 8月20日 白玉県から甘孜県へ移動
- 8月21日 甘孜県から色達県へ移動
ラルン五明仏学院で調査
その後, 馬爾康県へ移動
- 8月22日 馬爾康寺で調査
- 8月23日 馬爾康県から成都市へ移動

8月24日, 25日 成都市で資料収集
8月26日 成都市から帰国
今回の調査は櫻井義秀先生と合同で行った。

3. ヤチェン修行地調査

3.1 ヤチェン修行地の概況

ヤチェン修行地は、四川省甘孜チベット族自治州（以下、甘孜州と略す）白玉県に位置するチベット仏教の修行地である。海拔は約3,900メートル。

漢語の名称は「亜青鄔金禅修聖地」である。漢人は一般に「亜青寺」という俗称を用いているが、ヤチェンは中国政府の宗教管理では寺院に該当せず、あくまでも修行地の扱いである（詳細は〔川田2015〕を参照）。構成員の数は非公開であり、季節により流動的である。2011年8月、ヤチェン修行地の高僧の話では、「僧約三千人、尼僧約一万人」ということであった。

筆者は今回を含めると、これまで計6回の短期調査を行ってきた（2003年8月、2005年8月、2007年8月、2010年8月、2011年8月、2012年8月）。ヤチェン修行地に関する拙論として、〔川田2004a〕〔川田2005〕〔川田2006〕〔川田2008〕〔川田2015〕がある。

1985年に修行地を開設したのは、アチュウ・ラマ（1927-2011、ルント・ジェンツェン）と呼ばれる高僧であり、ロンサル・ニャンポの化身ラマである〔亜青寺2002〕。18歳の時、アリ・ドジェンチャンの侍者となり、以後43年間師弟関係を結んだ。その後、セラ・ヤンチュル師から指導を受け、更にラルン五明仏学院のケンポ・ジグメ・プンツォ（1933-2004）から秘法を伝授され、ニンマ派の密教秘法「大圓滿法」を極めた成就者として高い評価を得た〔亜青寺2000〕〔亜青寺2002〕。

経歴は不明な点が多く、1960年代から70年代にかけての政治の混乱期は、アリ導師とともに投獄され辛酸をなめたと伝えられている。ヤチェンの所在地はかつてアリ導師が修行した場所であり、アチュウ・ラマは師の勧めを受け、ここに修行地を開いた。

開設当初から1990年代までの状況を記した文献や写真は公開されておらず、修行地の発展過程を知る手がかかりはない。1990年代の状況は『増信妙薬』〔亜青寺2002〕に収録されている。

3.2 ヤチェン修行地における権威の委譲

2011年7月23日、アチュウ・ラマが圓寂した。筆者は7月31日から8月3日まで、修行地にて葬儀の様子を参与観察し、〔川田2015〕に発表した。

過去の調査と葬儀を通じて、アソン・リンポチュェがアチュウ・ラマの後継者として、修行地を主宰することが判明した。

アソン・リンポチュェ（1974-、ジャツァ・サンガ・テンジン）は四川省甘孜州新龍県に生まれ、12歳の時、アリ・ドジェンチャン（アチュウ・ラマの師）とアチュウ・ラマによりナムカニンポの化身ラマと認定された。その後、20歳でラルン五明仏学院のジグメ・プンツォ学院長より灌頂を受け、正式な継承者となる準備を進めていった〔亜青寺2009：24-38〕。その他の詳細な履歴に関しては今後の調査を待たなければならない。

アソン・リンポチュェが後継者に選ばれた理由は、チベット仏教における師資相承制度である。つまり、アチュウ・ラマにより後継指名され、埋蔵教やニンマ派の秘儀の直接伝授が行われたからである〔亜青寺2009：46〕。



図1 現在のアチュウ法王院、法体が安置され、日々法要が執り行われる（2012年8月、筆者撮影）

3.3 アソン・リンポチュェの講義

筆者はヤチェン修行地に滞在中、櫻井先生とともにアソン・リンポチュェの二つの講義を拝聴した。

一つは、新大経堂前の広場で朝8時から始まるチベット人出家者を対象とした講義である。早朝講義はアチュウ・ラマの時代から引き継がれており、1時間から2時間かけて行われる。

チベット仏教の世界では、高僧の死後も信徒の畏敬の念は存続する。アソン・リンポチュェは当面アチュウ・ラマのカリスマ性を巧みに利用しながら修行地での支配力をより強固にしていくであろう。アチュウ・ラマはヤチェン修行地が発展する過程で自らの卓越した呪力を誇示したが、アソン・リンポチュェ以後の後継者にもはや呪力は必要でない。今後、師資相承と化身ラマというチベット仏教が持つ二つの制度を組み合わせた支配体系がうまく機能していくと予想される。



図2 アソン・リンポチェの早朝講義
(2012年8月, 筆者撮影)

もう一つの講義は、閉閑修行僧坊横の小経堂で行われる。ここは「漢僧経堂」とも呼ばれ、アソン・リンポチェが漢人の出家者と在家信徒を指導する教場である。



図3 漢僧経堂で講義を行うアソン・リンポチェ
(2012年8月, 筆者撮影)

現在、ヤチェン修行地の構成員は、チベット人出家者の他に、数百名の漢人出家者と在家信徒がいる。漢人の滞在者数は流動的であり、夏は増加し冬は減少する。

ヤチェンで漢人指導を行う高僧は、アソン・リンポチェの他に、プーバ・タシ・リンポチェ(1968-)とイエシエ・ジャンツォ・リンポチェ(生年不明)がいる。後者2人はヤチェンに常駐しているわけではない。ヤチェンに不在時は中国国内の漢人居住地区で法話会を開き、弘法活動を精力的に行っている。彼らのヤチェンにおける活動は[川田2015]を参照いただきたい。



図4 漢人出家者に対応中のアソン・リンポチェ
(2012年8月, 筆者撮影)

4. ラルン五明仏学院調査

4.1 ラルン五明仏学院の概況

ケンポ・ジグメ・プンツォが四川省甘孜州色達県に開設したチベット仏教の教育機関である。当初はチベット仏教ニンマ派の教義を伝授するラルン仏教講習所であったが、1986年夏に、パンチェン・ラマ10世(1938-89)が色達県を視察した際、宗派にとらわれずにチベット仏教の教義と学問を教授する五明仏学院設立の必要性を政府に訴えた。

パンチェン・ラマ10世の色達県訪問を裏付ける資料をこれまで入手することができなかったが、台湾から出版された『浴火重生』[色達・慈誠2014]に、ラルンで撮影された貴重な写真が掲載された。

こうして2人の高僧の努力が実を結び、1997年に四川省宗教事務局が認可したことにより、ラルン五明仏学院が正式に誕生した。



図5 1986年パンチェン・ラマ10世(後左4)が色達県を視察した際、ケンポ・ジグメ・プンツォ(後左3)を表敬訪問した 出典:[色達・慈誠2014:口絵]

仏学院が持つ教学の理念は、東チベットに伝わる「リメ運動」という超宗派運動の流れをくむものである。つまり、宗派間での対立や批判をやめ、互いの傳承を尊重し守る姿勢を重んじたのである。

現在の学僧数は非公開であるが、一万数千人規模に達していることは確かである。その中には、ヤチェン修行地同様、漢人の出家者と在家信徒が含まれている。

学院長のジグメ・プンツォは現在の青海省班瑪県に生まれ、2歳の時、ニンマ派高僧レーラプ・リンパの転生者と認定された。16歳の時に中華人民共和国の成立を迎えたが、その後の詳しい足取りは不明である。ジグメ・プンツォの評伝として、弟子のケンポ・ソダジが著した『法王晋美彭措伝』[索達吉堪布 2001]がある。

仏学院は2000年から2001年の時期に、学院長の幽閉、尼僧僧房(一部)の破壊撤去、尼僧(一部)の放逐、中国共産党が派遣した工作組の駐留を中心とした肅正事件が発生したが、概ね2010年以降は平穏な日常を取り戻した。肅正事件の経過と原因については[川田 2015]を参照いただきたい。

仏学院設立当初の写真は『心中燃起の時代明灯』[色達喇榮五明仏学院 2007]に収録されている。

筆者は今回を含めるとこれまで計6回の短期調査を行ってきた(2001年12月, 2004年8月, 2007年8月, 2010年8月, 2011年8月, 2012年8月)。ラルン五明仏学院に関する拙論は[川田 2003][川田 2004b][川田 2007][川田 2010][川田 2012][川田 2015]がある。



図6 ラルン五明仏学院の尼僧大経堂と尼僧僧房群 (2012年8月, 筆者撮影)

4.2 ラルン五明仏学院の変貌

(1) 僧房屋根の鉄板化

図6の写真が示すように、僧房屋根に赤い波形鉄板が

多用されている。以前は木材で屋根を組み、ビニールシートを張った後、土をかぶせる工法が主流であった。現在、大多数の僧房は既存の土屋根の上に鉄板を置き、石や木材、コンクリートブロックで重しをしている。

筆者が2007年に訪問した際、このような現象は確認できなかったため、それ以降急速に広まったと思われる。学僧に確認していないが、おそらく政府もしくは仏学院を支援する組織が準備し、各僧房の形状に合わせて切断した後に設置したと考えられる。防水効果は向上したが、筆者は鉄板で真っ赤に染まった僧房群に違和感をもつ。

(2) ジグメ・プンツォ前学院長の肖像が増加

2011年の訪問時から気づいたことの一つは、巨大な肖像の増加である。経堂や新規開業したラルンホテル(喇榮賓館)の屋上に、ジグメ・プンツォ前学院長の肖像が設置されている。ヤチェン修行地のアチュウ・ラマ同様、高僧に対する畏敬の念は圓寂後も続く現象を視覚化したものである。これは同時に、現地の公安当局が仏学院に対する過度な規制を解除したことの表れとも理解できる。



図7 経堂の屋根に設置されたジグメ・プンツォ前学院長(左)とムンツォ現学院長(右)の肖像 (2012年8月, 筆者撮影)

(3) 鳥葬場の移転と見学者の増加

仏学院から南西方向約1キロメートルの場所に、鳥葬場がある。チベットの葬送は鳥葬師が遺体を解体し、鳥に食べさせるのが一般的である(天葬とも呼ぶ)。

今回、櫻井先生を案内した際、鳥葬場の位置が丘の下、つまり道路から近い場所に移転していることに気づいた。そしてカメラを抱えた多数の漢人観光客が見学と撮影を行っていた。信仰なき訪問者にとって、鳥葬見学は宗教的要素をもつ一種のアトラクションである。ラルン五明仏学院の事務局が鳥葬場を移動させたのは、信仰なき訪問者を意識した「アトラクション

の作り直し」[岡本：2015:58]を行うためであった。



図8 漢人見学者を意識した新たな鳥葬場
(2012年8月, 筆者撮影)

5. 信仰なき訪問者問題

5.1 「ニンマ・インフォメーション」(寧瑪資訊)

筆者が初めてラルン五明仏学院を訪問したのは2001年12月である。当時、「ニンマ・インフォメーション」(寧瑪資訊)のウェブサイトには、ラルン五明仏学院やヤチェン修行地等、東チベットのニンマ派関連のニュースが多数掲載されていた。ただし、現在閉鎖中。詳細は[川田2015]を参照いただきたい。



図9 寧瑪資訊のウェブサイト (2004年3月20日
閲覧), 出典: 寧瑪資訊 <http://www.nmzx.com/>

当時、このサイトを運営し、閲覧していたのは主に漢人出家者と漢人在家信徒であった。彼らが東チベットで学び修行するための情報のみが掲載され、観光客を対象としたものではなかった。筆者の調査では、ラルン五明仏学院に漢人観光客が増え始めたのは2010年以降、つまり公安当局の監視が弱まり、実際に訪問した個人の漢人観光客がインターネット上に写真を掲げ始めた頃である。

5.2 信仰なき訪問者の増加現象

筆者が2007年に訪問した時点までは、色達県公安局が

ラルン五明仏学院の入口にチェックポストを設け、外国人の進入を禁止していた。漢人はチェックポストで身分証を提示し、カメラを預けた後に入場が許可されていた。

漢人観光客の多くは信仰を持たない訪問者であり、主たる目的は巨大な僧房群の撮影、鳥葬の見学、高地体験(海拔約3800メートル)である。彼らは宗教と学問の空間を乱す侵入者であるとともに、一種の宗教的な体験を求め新たな世界観を開く「巡礼者」でもある。

このような信仰と観光が交差し、時に融合する現象をどのように捉えるべきであろうか。

岡本亮輔(宗教社会学, 聖地観光論)は、著書『聖地巡礼』の中で、「世俗化と私事化を経た現代の聖地巡礼を考えるためには、彼ら[信仰なき訪問者: 川田]の新しい実践も包み込めるような視座を作らなければならない。新しい訪問者たちの増加によって聖地のあり方は変化しているからである」と語る[岡本: 2015:22]。

ラルン五明仏学院について言えば、多くの学僧にとって、撮影目的の来訪者は学問の場の空気を乱すノイズである。ただし、カメラとビデオを抱えた来訪者の存在が、かつての肅正事件の再発を抑止する役割も果たしている。

そして、漢人訪問者の存在は、仏学院にやって来たチベット仏教を信仰する中国共産党員(主に漢人)の隠れ蓑にもなっている。筆者はラルン五明仏学院を「宗教と観光が交差することで生じる文化的な変容」[岡本: 2015:28]として論じる必要性を感じている。

5.3 日本人の東チベット宗教ツーリズム

2015年1月、ウェブサイト上に「東チベット旅行倶楽部」が開設された(<http://www.higashitibet.com/>)。日本人男性が運営する個人旅行社のサイトであり、個人観光客を四川省甘孜州、阿壩チベット族チベット族自治州へ案内することを目的としている。観光ルートの主要拠点はラルン五明仏学院である。このサイト上の情報を利用したり、主催ツアーに参加したりすることで、日本に居住する信仰なき訪問者を東チベットの信仰の場に導いている。筆者は参加者の安全管理や健康管理等の問題に不安を覚えるが、日本人が仕掛けた東チベット宗教ツーリズムの動向を見守りたい。

6. 青海省玉樹チベット族自治州調査行程

2013年

8月25日 大阪から西安市へ移動

8月26日 西安市から玉樹市へ移動

- 8月27日 玉樹市から囊謙県へ移動
- 8月28日 公雅寺で調査
- 8月29日 囊謙県から雜多県へ移動
- 8月30日 斯日寺で調査
- 8月31日 雜多県から玉樹市へ移動
- 9月1日 玉樹市で宗教調査
- 9月2日 玉樹市から西寧市へ移動
- 9月3日 西寧市から帰国

筆者は過去に3回、玉樹チベット族自治州（以下、玉樹州と略す）を訪問した。

【1997年8月】玉樹県、称多県

【2009年8月】玉樹県

【2013年8月】玉樹市、囊謙県、雜多県

2013年7月、中華人民共和国民生部（日本の厚生労働省に相当）は玉樹県から玉樹市への移行を承認した¹⁾。1997年初回訪問時の見聞は、[川田1999a] [川田1999b] [川田1999c] [川田1999d] [川田1999e] [川田2000a] [川田2000b] を参照いただきたい。

1997年及び2009年（震災発生の約8ヶ月前）に撮影した写真資料は、『玉樹資料集』に収録する予定である（2017年発行予定）。

7. 玉樹チベット族自治州関連資料

玉樹州は青海省の南西部に位置し、玉樹市、囊謙県、曲麻萊県、称多県、雜多県、治多県より構成されている。中華人民共和国成立後の玉樹州の概況を知るための資料は多くない。筆者が確認したものを以下に示す。

- (1) 『玉樹藏族自治州概況』 [《玉樹藏族自治州概況》編写組編 1985]
- (2) 『玉樹』 [博巴・倉巴旺蘇主編 1991]
- (3) 『玉樹州志』 (上下) [《玉樹州志》編纂委員会編 2005]
- (4) 『玉樹藏族自治州概況』 (修訂本) [《玉樹藏族自治州概況》編写組・《玉樹藏族自治州概況》修訂本編写組編 2008]
- (5) 『玉樹県志』 [玉樹県地方志編纂委員会編 2012]

(1)は第3章第6節の中に、玉樹州内の宗教状況に関する概説がある。「玉樹地区の寺院は最多の時171寺に達し、その内モスクは1寺であった」という記述がある。ただし、モスクの開設地と時期は記載がない [《玉樹藏族自治州概況》編写組編 1985: 60]。

(2)は玉樹州内6県の自然、資源、名所旧跡、宗教活動、

民族文化を中心に紹介した図版資料集である。1980年代の州内各地を撮影したカラー図版は文字資料とともに価値が高い。

(3)の「大事記」は1996年まで記載されている。下巻第5編第2章に、ボン教、チベット仏教各宗派の寺院、玉樹州仏教協会の活動が紹介されている。イスラームに関する記述はない。

(4)は第1章第3節に、ボン教とチベット仏教四大宗派に関する概説がある（イスラームへの言及なし）。そして、第1章第3節に、計34寺が文物として紹介されている（モスクは含まれていない） [《玉樹藏族自治州概況》編写組・《玉樹藏族自治州概況》修訂本編写組編 2008: 32-36, 45-48]。

(5)本書は2012年出版であるが、2010年玉樹震災に関する記述はない。「大事記」は2005年まで記載されている。第5編第2章に、ボン教及びチベット仏教各宗派の寺院が紹介されているが、イスラームに関する記述はない。玉樹州他県の「県志」は出版されていない。

玉樹州の宗教状況に関する先行研究として、「青海省チベット仏教寺院の現状について III ——玉樹チベット族自治州を中心にして」 [則武 2005] があるが、依拠した資料が提示されていない。

8. 2010年青海省玉樹震災

2010年4月14日、現地時間午前7時49分、青海省玉樹州玉樹県（現在の玉樹市）を震源とするマグニチュード6.9（中国地震局発表7.1）の大規模地震が発生した。震源の深さは約17キロメートル。

日干しレンガと土塀でできた民家はことごとく倒壊し、住民の多くは自宅で生き埋めとなり息絶えていった。掘り出された遺体は毛布やシーツに巻かれて次々と丘の上の結古寺へ運ばれ、僧侶が対応に追われた。中国政府は死者2698人、行方不明者270人（2010年5月30日時点）と発表した²⁾。結古寺の高僧は一万人に達すると語っている³⁾。中国では少数民族地区における自然災害は、民族問題や宗教問題への波及と政府批判の高まりを避ける目的により、正確な被災状況が公表されないことが多い。

震災発生後の玉樹関連公式ニュースは、2015年9月27日現在、以下の政府及び国営通信社他のウェブサイト上で確認できる。

- (1) 中国政府網（2015年9月25日閲覧）

<http://www.gov.cn/ztzl/yushu/>

- (2) 中国地震信息网（2015年9月25日閲覧）

<http://www.csi.ac.cn/manage/html/4028861611c5c2ba0111c>

5c558b00001/qhyushu7.1/index.html

(3) 中国新聞網 (2015年9月25日閲覧)

<http://www.chinanews.com/4/special/qinghaiearthquake/>

(4) 新華網 (2015年9月25日閲覧)

<http://www.xinhuanet.com/society/qhysdz/>

9. 玉樹震災関連資料

震災が発生した2010年及び翌年の2011年に、中国共産党、中国政府、報道機関、個人による救援活動の報告書や追悼集が相次いで出版された。筆者が確認した文献資料を以下に掲げる。

- (a) 『永不放棄——同玉樹在一起』[中共青海省委宣传部2010]
- (b) 『同人民在一起——青海玉樹抗震救災全記録』[新華社総編室編2010]
- (c) 『影像的記憶——玉樹』[馬福江2010]
- (d) 『玉樹哈達——獻給救援“4・14”大地震的人們』[鄧振璞編著2010]
- (e) 『危難時刻——4.14玉樹大地震通訊報道集』[中共玉樹州委宣传部・玉樹州文化體育廣播電視局編2010]
- (f) 『青海省政法系統玉樹4.14抗震救災攝影紀実』[張愛軍編2010]
- (g) 『4.14玉樹地震影像志』[冶青林主編2011]
- (h) 『為了巨災後的183名玉樹孤兒』[王永端2011]
- (i) 『玉樹大地震』[阿琼2011]
- (j) 『玉樹震撼——中国新聞社青蔵高原抗震救災紀実』[中国新聞社2011]

(a)は中国共産党青海省委員会宣传部が編集したものであり、中国人民解放軍、中国人民武装警察部隊、公安、消防等、党や政府が指揮した救援活動の成果と意義を賞賛した内容である。ただし注目すべき点は、「僧人救援隊」と題する特集の中に、ゾクチェン(佐欽)寺(四川省徳格県)の高僧テンジン・ルント・ニマ(生年不明)が指揮したチベット人僧侶による救援活動の一部が紹介されていることである。その他、セルシュ(色須)寺(四川省石渠県)や江瑪仏学院(四川省石渠県)の活動、被災後のジェグ(結古)寺(青海省玉樹市)の写真も掲載されている(195-200頁)。

(b)は新華社(国営通信社)の報道をまとめたものであり、党や政府の迅速な対応が紹介されている。台湾紅十字医療隊の活動記事も含まれている(149-150頁)。

(c)は個人が編集したモノクロ写真集であり、被災者の

窮状と党・政府の救援活動双方がバランス良く配置されている。僧の救援活動も紹介あり(100頁)。

(d)は人民日報(中国共産党中央委員会の機関紙)が編集した報道記録である。

(e)は中国共産党玉樹州委員会が編集した震災救援記録である。前半はチベット語、後半は漢語で構成されている。チベット人記者の文章が多数を占める。

(f)は中国共産党青海省委員会政法委員会(情報、治安、司法、検察、公安等の部門を主管する機構)が編集した写真集である(非売品)。

(g)はチベット人カメラマン冶青林(1964-、玉樹市結古鎮出身)の作品集である。民衆の被災状況と党・政府の活動が主体である。宗教に関連する写真も多数収録されている点に特徴がある。以下に例をあげる。

- ・セルシュ寺の救援活動(49頁)
- ・チャング(禪古)寺(青海省玉樹市)の被災状況(63頁)
- ・ジェグ寺の被災状況(65頁)
- ・モスク(青海省玉樹市)の被災状況(73頁)
- ・パンチェン・ラマ11世(中国政府認定)の玉樹来訪(77頁)
- ・ムスリムによる救援活動(98-99頁)
- ・集団火葬とチベット人僧侶による読経(120-121頁)
- ・ムスリムのための臨時礼拝所(124-125頁)
- ・ジャンマニ(真言や経文を刻んだ石を積んだ大規模な塚)で開催された祈祷会(176-181頁)

(h)は従軍経験をもつ報道関係者が著したルポルタージュである。

(i)はチベット人作家のルポルタージュである。

(j)は中国新聞社(国営通信社)が編集した報道文集である。宗教関係では、パンチェン・ラマ11世(中国政府認定、1990-)による北京での法要、玉樹市来訪時の活動が紹介されている(204-205頁)。その他、中国仏教協会が伝印名誉会長(1927-)を中心とした募金活動の様子を伝えた(206-207頁)。



図10 セルシュ寺(四川省石渠県)の僧が玉樹県の被災者に救援物資を配布, 出典:[冶青林主編2011:49]

10. 日本赤十字社の支援活動

玉樹震災の被害は玉樹州内にとどまらず、隣接する四川省甘孜州石渠県にも及んだ。調査の過程で、日本赤十字社 (以下、日赤と略す) が2013年9月に発表した報告「中国・青海省地震復興支援事業の取り組み」に、そのことを示す記述を確認した⁴⁾。日赤の報告には、四川省石渠県日扎村にて実施した緊急支援物資の配布場面の写真が掲載されている。



図11 石渠県で被災した小学生に日赤が支援物資を届ける, 出典: 日本赤十字社「中国・青海省地震復興支援事業の取り組み」

日赤が行った支援内容は、中国紅十字会との協議を経て決定されたものである。

事業の概要を以下に示す。

【実施時期】2010年4月～2013年

【対象地域】青海省玉樹玉樹県、称多県、曲麻萊県、四川省甘孜州石渠県、甘孜県、徳格県、白玉県

【支援総額】4億1,974万478円

【支援事業(1)学校再建】約1億5,600万円、玉樹県仲達郷寄宿制小学校

【支援事業(2)医療施設再建】約1億2,300万円、玉樹市仲達郷衛生院、称多県尕朵郷衛生院

【支援事業(3)越冬支援】約5,500万円、布団やブーツの支給

【支援事業(4)緊急通信指揮車両】約4,900万円、インターネットやGPSを活用した情報収集機能を重視

日本の医療機関では日赤の他に、一般社団法人徳洲会が震災発生直後に先遣隊 (医師、管理栄養士、通訳、コーディネーターより構成、2010年4月15日～20日中国滞在) を派遣したことが報告されている⁵⁾。先遣隊は北京市、青海省西寧市、共和県で情報収集と現地視察を行ったが、被災地周縁地域において医療ニーズは高くないと判断し、

緊急災害医療チーム本隊の派遣を見送った。

11. ジェグ寺 (青海省玉樹市) の復興状況

2013年8月26日と9月1日に、玉樹市行政の中心地である結古鎮にて宗教施設の復興状況を確認した。

結古鎮北側の丘の上にジェグ (結古) 寺というチベット仏教サキャ派の僧院がある。『玉樹県志』には、1398年創建、僧350人と記されている [玉樹県地方志編纂委員会編2012:517]。ジェグ寺はパンチェン・ラマ9世 (1883-1937, ゲレクナムゲル) が圓寂した場所でもある。



図12 ジェグ寺再建計画図 (2013年9月, 筆者撮影)

震災により寺院の大教室や僧房の大半は崩壊したが、瓦礫はすでに撤去されていた。寺院全体の再建事業は、北京の中央政府と青海省政府が負担し、甘肅天苑古典建築行程会社が請け負った。現地には事業構想の見取り図が掲げられ、チベット仏教寺院の再建モデルとして急ピッチで工事が進められていた。西側と南側では鉄筋コンクリート造りの新たな僧房群がほぼ完成していたが、極めて無機質な印象を放っていた。

多額の資金を投じた復興の推進は、中国政府からインドのチベット亡命政府への政治的なアピール (統一戦線活動) も兼ねている。

寺院付近の平地には仮設経堂が設置され、日常の宗教活動の一部は維持されていた。僧は政府や中国紅十字会が提供したテントを仮設僧坊として利用していた。



図13 ジェグ寺の新僧坊 (2013年9月, 筆者撮影)



図14 ジェグ寺のテント僧坊 (2013年9月, 筆者撮影)



図15 玉樹県を訪問したパンチェン・ラマ11世 (中国政府認定), 出典: [冶青林主編 2011: 77]

震災から1ヶ月後の5月14日, パンチェン・ラマ11世 (中国政府認定) が北京から玉樹に駆けつけ, ジェグ寺の仮設テントで法要を執り行い, 死者を弔った。そして, 政府要人として玉樹入りした招かれざる「愛国活仏」は, 救援活動に従事する中国人民解放軍や中国人民武装警察部隊を激励し, 被災者の感情を逆なでした。

12. 玉樹市結古モスクの復興状況

玉樹市の人口構成は, 2000年実施の政府調査によれば,

チベット人が約95%, ムスリムが約0.6%である [玉樹県地方志編纂委員会編 2012: 89]。ただし, 筆者が震災前の2009年に結古鎮を歩いた時の印象では, 市内のムスリム人口は統計上より多いと感じた。市中心部の結古鎮はチベット人とムスリムが混住する町であり, 2006年結古鎮にモスク (清真寺) が完成した。

かつて最盛期には3万人のムスリムがこの町で暮らし, 運輸や薬材, 毛皮の売買で玉樹の経済を支えてきたと伝えられている。ただし, 『玉樹州志』にも『玉樹県志』にも, この地域におけるイスラームとムスリムに関する記述はない。玉樹州全域は圧倒的にチベット人の勢力が強く, 党や政府の要職はチベット人と漢人が占めている。加えてチベット人とムスリムは不仲であることが原因である。

筆者は2013年8月に玉樹州の雜多県で宗教状況に関する聞き取り調査を行った際, 県中心部で暮らすムスリムがチベット人の役人に強い嫌悪感を示した。雜多県では現在もモスクの建設が許可されず, 筆者は土塀小屋を利用してひっそりと礼拝が行われていることを確認した (後述)。同様に玉樹州囊謙県でもモスクは見当たらなかった⁶⁾。

玉樹市結古鎮のモスク西側には, ムスリムの居住区が広がり, 食品や雑貨, 金物職人を中心とした個人商店が軒を連ねていた。震災により玉樹市では65人のムスリムが犠牲となった。モスクは正面の瓦屋根が大きく歪み, 内部は床が崩落し全壊となった。震災当日の午後, 青海回族サラル族救援隊がハラール (イスラーム法で許された) 食品と医薬品を準備して現地へ向かった⁷⁾。現在流通している医薬品の多くは豚由来の分解酵素が使用されているため, ムスリムが使用可能な医薬品は限られているからである。



図16 被害を受けた結古鎮のモスクで祈祷を行うムスリム, 出典: [冶青林主編 2011: 73]



図 17 完成間近の新結古鎮モスク
(2013年9月, 筆者撮影)

2013年9月1日, モスクにてアホン(教長, 漢語表記は阿訇)から聞き取り調査を行った。その概要を以下に記す。

- (1)モスクは震災による死者数を公表していないが, すべてのムスリムに土葬が執り行われた。
- (2)モスクの再建資金は青海省政府と玉樹州政府の負担であり, 政府の配慮に感謝している。モスクは完成間近であり, モスクでの礼拝はすでに始まっている。
- (3)政府の復興住宅にはチベット人が優先的に入居しており, ムスリムの入居枠は少ない。住居の問題で他県への移住を余儀なくされた者もいる。

13. コンヤップ(公雅)寺(青海省囊謙県)調査

2013年8月27日と28日にコンヤップ(公雅)寺にて調査を行った。所在地は青海省玉樹州囊謙県札扎郷。囊謙県は玉樹市の南方約220キロメートルに位置し, 西寧市からの距離は約980キロメートルである。札扎郷は县城の南方約30キロメートルのところにある。

囊謙県の宗教状況に関する公式資料は極めて少ない。筆者が確認した資料は, 以下の2点のみである。

- (1)『玉樹州志』第5編第2章には, チベット仏教各宗派の寺院名が掲げられており, カギユ派の項目にコンヤップ寺は「1664年創建, 定員30人, 現有人数260人」と記されている[《玉樹州志》編纂委員会編2005:867]。
- (2)『康巴秘境, 江源独秀——囊謙県』は囊謙県人民政府が制作した非売品の冊子であり, 県内の風光と主要寺院がカラー写真で紹介されている。資料にはコンヤップ寺はカルマパ7世(1454-1505, チュータク・ギャムツォ)の弟子が1470年に創建とある[才讓・任宝元主編(発行年不明):15]。

2013年当時, コンヤップ寺に関する最も詳細な資料は, ウェブサイト上に掲載された「公雅寺現状と発展」⁸⁾であったが, 2015年現在このサイトは閉鎖中である。後述するケンポ・カルツェ事件の影響と考えられる。

現在のコンヤップ寺は文化大革命終結後, 桑傑単増・リンポチェ(1919-2002)の尽力により再建されたものであり, 仏学院を併設している。数キロメートル離れた場所に尼僧院も存在する(筆者未確認)。在籍する僧は約300人, 尼僧約100人, 少年僧約100人。尼僧は閉関修行を行う者とヤチェン修行地(四川省白玉県)で修行と労働を行う者に分かれる。尼僧院に関しては, 台湾桃園県の在家信徒夫婦が紹介した写真が紹介されている(瑪嘎拉安尼院と竹欽安尼閉関中心, 2004年, 2007年, 2009年)⁹⁾。

寺院内には少年僧に言語教育を行うクラスが開設されている。チベット語, 英語, 漢語が開講されており, 少年僧は3種類の言語習得を目指す。英語と漢語の学習は, 彼らが将来中華人民共和国もしくは外国で暮らすことを想定した際に必要なものである。筆者は中国領内のチベット仏教寺院でこのような3種類の言語教育を行う現場を確認したのは初めてである。



図 18 コンヤップ寺全景(2013年8月, 筆者撮影)



図 19 コンヤップ寺が併設する学校で学ぶ少年僧
(2013年8月, 筆者撮影)

コンヤップ寺にはパチン、リング、ペマ等数名の化身ラマがいる。今回の調査ではリング・リンポチェとペマ・リンポチェに謁見したが、パチン・リンポチェ(1968-)は不在であった。寺院を経済的に支えているのは、パチン・リンポチェの積極的な弘法活動である。チベット人、漢人、海外華人を問わず、多くの信徒を受け入れている。襄謙县城郊外に孤児学校を開設し、慈善活動に力を注いでいることでも知られている。



図20 桑傑単増・リンポチェ(左)とカルマパ17世
(2013年8月, コンヤップ寺にて筆者撮影)



図21 パチン・リンポチェ
(2013年8月, コンヤップ寺にて筆者撮影)

近年のコンヤップ寺の活動として、注目すべき点が二つある。一つは世界平和祈願大法会の開催である。資料「公雅寺現状と発展」によれば、2001年よりほぼ毎年開かれ、2011年に第10回目を数えた。場所は襄謙県香達鎮のコンヤップ寺別院である。ここでは本寺から派遣された僧が常駐し読経を行っている。



図22 コンヤップ寺別院(2013年8月, 筆者撮影)

法会の責任者はパチン・リンポチェ。参加者はチベット仏教カギユ派内の他の宗派及びゲルク派、ニンマ派、サキャ派の僧及び在家信徒である。海外からの参加者と支援者、そして国内の漢人信徒が多額の布施を行うことにより、数千人規模の法会が維持されてきた。

資料「銅色吉祥山——光明蓮師宮殿」¹⁰⁾には、広州、香港、マレーシア、シンガポールに設置された信徒の連絡先が記されている。他宗派の僧侶が参加するのは、かつて桑傑単増・リンポチェが宗派を超えた宗教活動(リメ運動)の支持者であり、晩年漢人居住地区で弘法活動を展開したことと関係している。

コンヤップ寺に関するもう一つの注目点は、精神的支柱ケンポ・カルツェの存在である。

14. コンヤップ寺「ケンポ・カルツェ事件」

14.1 事件発生と抗議の動画

2013年12月6日、四川省成都市内でコンヤップ寺のケンポ・カルツェ(1975-)が公安当局に拘束される事件が発生した(本稿では「ケンポ・カルツェ事件」と呼ぶ)。事件の速報は海外のチベット支援活動組織Phayul.com等を通じて伝えられた¹¹⁾。

ケンポ・カルツェは青海省襄謙県出身、カルマ(噶瑪)寺(カルマ・カギユ派の早期本寺、チベット自治区昌都県)やラルン五明仏学院(8年間)で学問を修めた後、コンヤップ寺の教学責任者となった。筆者がコンヤップ寺を訪問した際、ある化身ラマが「彼は私にとって学問上の師であり、強い絆で結ばれている」(2013年8月27日)と語った。

ケンポ・カルツェが逮捕された後、寺院の関係者と襄謙県の信徒が約4000人の署名を集め、高僧の解放を求める請願書を当局に提出した。その後、集団で行われた抗議行動及び、襄謙県政府との協議の様子を録画した動画がVOAのウェブサイト他に掲載された。

China Detains Popular Tibetan Khenpo and 16 Supporters
VDA TIBETIANさんの動画



図23 ケンポ・カルツェの解放を求めるデモ
出典：<https://www.facebook.com/photo.php?v=625257237510065>

14.2 事件発生背景

事件発生背景を中原一博氏（インドのダラムサラでチベット支援活動に従事する建築家）が提供した資料から探る¹²⁾。

- (1) ケンポ・カルツェは学問への信頼、チベット言語文化の教育、環境保護、震災支援等、多方面の活動を積極的に展開していることで知られる。地元の囊謙県及び隣接する昌都県や玉樹市一带では僧や民衆から大きな支持を得ている高僧であるため、公安当局が彼の行動に目を光らせていたと考えられる（中原2014年4月16日）。
- (2) 2008年チベット騒乱の過程で、10月27日に昌都県噶瑪郷の政府庁舎が爆破される事件が発生した。誰がどのような目的で爆破したのかは不明であるが、当局は近くにあるカルマ寺の僧が「関与した」と判断し、一部の僧を拘束した。弾圧を逃れるため隣接する囊謙県のコンヤップ寺に身を隠した僧もいた。ケンポ・カルツェは事件に「関わった」僧を隠匿した嫌疑をかけられた（中原2011年11月14日、2014年1月4日）。
- (3) 2013年10月21日、ケンポ・カルツェは民衆から法要開催の要請を受け、囊謙県に隣接するチベット自治区類烏齊県に向かっていた。中国政府の宗教管理では、僧が居住する省や自治区を跨いで宗教活動を行うことを禁止している。そこで彼は山越えの道を歩き、公路上の検問所を迂回して法会会場に到着した。後日、当日の行動を記した手記を公表し、中国政府の宗教管理に疑問を呈した（中原2014年2月6日）。
- (4) 2010年の玉樹震災が発生した当日、ケンポ・カルツェ

は寺の僧とともに結古鎮へ駆けつけて救援活動を行った。ケンポが率いた救援隊の献身的な活動は、多くの被災者の心に希望の灯りをともした。後に活動内容を記録した映像作品（DVD『災難中の希望』）を公表したが、当局に没収された（中原2014年4月16日）。

筆者はコンヤップ寺でケンポ・カルツェを訪問し、ラルン五明仏学院での修行と玉樹震災の活動について聞き取り調査を行った（2013年8月27日）。記録映画をめぐって、当局との間に軋轢が生じたことも確認し、映像の一部をケンポの僧坊で視聴した。翌朝、大経堂にて僧の修行を見学した後、カルツェ僧院で行われた講義を聴講した。カギユ派は密教集団であり、師弟関係を重んじることで知られている。大経堂には桑傑単増・リンポチェとカルマパ17世の肖像が掲げられていた。



図24 ケンポ・カルツェの講義（2013年8月、筆者撮影）

14.3 カギユ派とニンマ派

コンヤップ寺はチベット仏教カルマ・カギユ派に属する。カルマ・カギユ派はカギユ派の中の最大支派であり、総本山はツルブ（楚布）寺（ラサ市堆龍徳慶県）。最高位の化身ラマはカルマパ17世（1985ー、ウゲン・ティンレー・ドルジェ）。彼は1999年12月末にツルブ寺を脱出し、2000年1月インドへ逃れ亡命を申し出た。現在、ダラムサラ郊外のギュート寺に在住している。このような経緯により、中国領内のカルマ・カギユ派寺院の中には、公安当局に警戒されているものもある。

筆者は〔川田2015〕の中で、ケンポ・ソダジが率いた玉樹震災救援隊の活動を紹介した。ケンポ・ソダジ（1962ー）はラルン五明仏学院に所属するチベット仏教ニンマ派の高僧であり、胡錦濤時代に中国共産党が展開した「宗教と和諧」政策に協力的であったことで知られている。

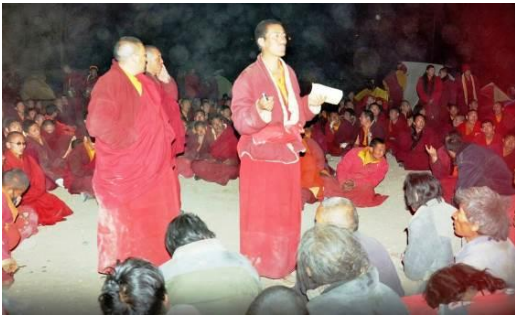


図 25 玉樹震災での支援活動を通じて被災者に語りかけるケンポ・カルツェ

出典：http://woeser.middle-way.net/2014/04/blog-post_14.html

震災救援をめぐって、中国政府はニンマ派のケンポ・ソダジの活動を賞賛した一方で、カルマ・カギユ派のケンポ・カルツェの活動を非難した。このことは現在の中国において、ニンマ派は中国政府と親和性が高く、カルマ・カギユ派は親和性が低いことを示す一例であると言える。

中国共産党の宗教管理はチベット仏教各宗派に対して同一の対応を行っているわけではない。地域や寺院の規模によっても異なるが、一般的な傾向としてゲルク派に厳しく、ニンマ派に緩いと言える。カギユ派はその中間に位置する。

その後、2014年10月海外の報道は、ケンポ・カルツェは逃亡僧隠匿及び国家機密漏洩の罪で懲役2年6ヶ月が確定したと伝えた¹³⁾。

14.4 テンジン・デレク・リンポチェの獄死

僧俗から信頼され、宗教活動や公益活動を活発に行うチベット仏教の高僧が投獄された過去の例として、テンジン・デレク・リンポチェ（1950—2015）がいる。彼は四川省甘孜州理塘県一帯で福祉や教育活動に尽力した化身ラマである。2002年四川省成都市で起こった爆破事件に「関与」した罪で死刑判決、後に終身刑に減刑、2015年7月服役中に獄死した。爆破事件への関与の有無、裁判の詳細、収監中の健康状態等、事件に関する詳細は現在も不明である。ケンポ・カルツェ事件は、第2、第3のテンジン・デレク事件に位置付けられるものであり、今後の動向に注目しなければならない¹⁴⁾。

15. 青海省雑多県の宗教状況

15.1 雑多県とカギユ派

雑多県は玉樹州の東南部に位置し囊謙県及びチベット

自治区昌都地区に隣接する。平均海拔は4200メートル、人口約3.4万人（2013年）である。冬虫夏草の産地であり、豊富な鉱物も有する。メコン川の源流でもあることから、中国政府は雑多県を資源の供給地として重視している。雑多県に関する基礎データ及び宗教活動状況を把握するための資料は、『玉樹州志』（上下）〔《玉樹州志》編纂委員会編2005〕である。2015年9月現在、『雑多県志』は未刊行。

省都の西寧市からの距離は約1,030キロメートル。平均海拔は約4,200メートル、交通の便が悪い上、観光地としての注目度も低い。この地を訪れる外国人は極めて少ない。過去に外国人による宗教調査が行われた情報も確認できない。筆者は今回、8月29日と30日に県中心部の薩呼騰鎮でチベット仏教とイスラームに関する調査を行った。

『玉樹州志』によると、雑多県内にあるチベット仏教カギユ派寺院の数は15、ニンマ派4、ゲルク派1、サキヤ派0である〔《玉樹州志》編纂委員会編2005：859—876〕。この中で筆者は8月30日にカルマ・カギユ派のズル（斯日、日歴、色日）寺（1396年創建、雑多県阿多郷）を訪問した。

15.2 ズル寺の宗教政策スローガン

寺院は薩呼騰鎮から西へ約3キロメートルの所に位置している。本堂の裏手では多数の仏塔が建設中であり、寺院の再建計画は7割程度完了した状態にある。



図 26 ズル寺の巡礼路（2013年8月、筆者撮影）

僧の説明では主たる化身ラマは4人いる（ダジェ・ジヤンツォ・リンポチェ、ドゥガ・リンポチェ、トゥテンセシエ・リンポチェ、トゥチュン・リンポチェ）。在籍する僧は約100人、その内少年僧が半数を占める。

応接室兼食堂には、中国共産党雑多県委員会が作成した宗教政策のスローガンが掲げられていた。以下に示す。

- (1) 「護国利民 共創和諧——藏伝仏教和諧寺廟創建活動 倡議書」(2012年6月6日, 中国仏教協会藏伝仏教工作 委員), 中共雜多県委統戦部, 雜多県民族宗教事務局
- (2) 「全県宗教界中広泛開展感恩銘愛, 勤學精修, 愛國愛 教, 持戒守法主題教育活動」2013年5月5日, 雜多県 委統戦部, 雜多県民族宗教局, 県主題教育活動領導小 組辦公室
- (3) 「四個維護 四種意識 公民道德規範」



図 27 ズル寺に掲げられた宗教政策・宗教管理のスローガン (2013年8月, 筆者撮影)

(1)の「和諧寺院」とは胡錦濤時期(2003年～13年)の「宗教と和諧」政策に協力的な「模範的」寺院と言い換えることもできる。政府が求める法令遵守や民族団結の基準を満たした寺院は「和諧寺院」に認定される制度である。2012年6月からチベット仏教寺院に対して認定制度が始まった¹⁵⁾。

(2)は国家宗教事務局が、各宗教組織に法令遵守、民族団結、愛國愛教を呼びかけるスローガンである。2012年以降、毎年6月を寺院や教会における法令学習の強化月間に指定することも決まった[国家宗教事務局2012:401-404]

(3)の「四つの擁護」とは「法律尊嚴, 人民利益, 民族団結, 祖国統一を擁護する」ことを示しており, 胡錦濤時期に定められた「チベット政策の指針」(2010年)の中の「五つの擁護」(社会の安定, 社会主義法律と制度, 人民大衆の根本的な利益, 祖国統一, 民族の団結)に基づいたものである。

筆者は過去に二十数年間, 東チベットのチベット仏教寺院を調査してきたが, 寺院内で党や政府のスローガンがこのように目立つ形で掲示されていた例は多くない。ただし, 筆者が観察した限りでは, ズル寺は公安当局の

厳しい監視下に置かれているわけではなく, 雜多県の党委員会と政府が胡錦濤の「宗教と和諧」政策を熱心に宣伝した事例にすぎない。

15.3 イスラームの活動

次にイスラームの活動を紹介する。『玉樹州志』には, 州内各県のイスラームに関する情報は記載がない。8月29日, 雜多県薩呼騰鎮にてムスリムへの聞き取り調査を実施した結果, 以下のことが判明した。

- (1) 雜多県宗教事務局はモスクの建設を許可しない
- (2) 薩呼騰鎮に居住するムスリムの大半は自宅で礼拝を行う
- (3) 一部のムスリムは薩呼騰鎮内の土塬小屋に集まり, 簡易礼拝所として使用している
- (4) 宗教指導者であるアホンはいない
- (5) 大きな宗教行事に参加する際は, 玉樹市結古鎮のモスクへ出かける
- (6) アラビア語の学習は困難である



図 28 土塬の小屋を利用したムスリムの簡易礼拝所 (2013年8月, 筆者撮影)

図 28 は筆者が確認した簡易礼拝所である。礼拝所の表示はなく, 外観は粗末な小屋である。1日5回行う礼拝の時に開錠する。薩呼騰鎮のムスリムの男性は「薩呼騰鎮に居住するムスリムは約200人, 個人商業者と農民が主」と語った。

16. 新疆ウイグル自治区調査行程

2013年

- 10月23日 大阪からヤルカンド県へ移動
- 10月24日 ヤルカンド県で調査
- 10月25日 インギサル県で調査
- 10月26日 カシュガル市で調査

10月27日 カシュガル市で調査
 10月28日 ウルムチ市で調査
 10月29日 ウルムチ市から帰国

筆者の新疆ウイグル自治区訪問は、今回が初めてである。大阪から北京とウルムチ経由でカシュガルまで、フライトの条件が整えば1日で移動が可能である。今回の予備調査の目的は、同じく民族紛争と宗教問題を抱える中国領内チベット人居住地区（主に東チベット）と比較するための情報収集である。交通や宿泊事情から、社会情勢や党の民族政策を知る手がかりを得ることもできる。チベット自治区と異なり、外国人の新疆訪問に特別な許可は必要ない。新疆ウイグル自治区における宗教調査は、事情が許せば今後も継続する予定である。

17. 新疆ウイグル自治区ヤルカンド県の宗教調査

17.1 ヤルカンド県とアルトゥン・モスク

ヤルカンド（莎車）県は新疆ウイグル自治区の西南部に位置し、カシュガル地区に属する。平均海拔は1,230メートル、人口は約80万人（2013年）。ヤルカンドに関する基礎的なデータは『莎車県志』[莎車県地方志編纂委員会編1996]が詳しい。

カシュガルからヤルカンドまでの距離は約200キロメートルであり、タクシーと高速道路を利用すれば2時間で移動可能である。筆者は大阪を発った日の深夜にヤルカンドに到着した。

新疆ウイグル自治区は基本的に北京時間を採用しているが、北京とカシュガルの間には約2時間のズレがあるため、北京時間から2時間遅らせた新疆時間が日常生活に利用されることが多い。つまり、日本が23時の時、北京時間では22時、新疆時間では20時となる。新疆では北京時間の24時であっても、航空機は運航し市街地の商業活動は通常通りであった。

この地域にイスラームが入ってきたのは10世紀であり、それ以前は仏教、マニ教、景教（キリスト教ネストリウス派）が信仰されていた。当初、仏教徒が強い抵抗を示したが、11世紀にイスラームが主導的な地位を得た。現在、ヤルカンドのイスラームはスンナ派とイスマール派（シーア派の一派）に分かれるが、スンナ派の勢力が圧倒的に強い[莎車県地方志編纂委員会編1996:739-741]。

『莎車県志』によると、県内開設のモスクは1,514(1990年)を数える。その中で最大規模はアルトゥン・モスク（1533年創建）であり、かつてのヤルカンド・ハン国（16～17世紀）の王族墓地に隣接している。文化大革命収束

後の1988年から修復が始まり、現在ほぼ完了している。モスクを中心に旧市街が残っており、周囲には民族用品店、鍛冶屋、飲食店等が軒を連ねている。



図29 アルトゥン・モスク（ヤルカンド県）

（2013年10月、筆者撮影）

イスラームの礼拝所をアラビア語でマスジド（masjid, ひざまづく場所）と言う。モスク（mosqu）はマスジドの英語訛りである。現代ウイグル語では、マスジドが転訛してメスチト（meschit）と呼ぶ。本稿では、他稿で用いた用語との同一性保持からモスクの呼称を用いる。

17.2 ヤルカンド県の民族紛争

筆者のヤルカンド訪問後、現地では民族問題がからむ事件が相次いで発生した。報道記事を以下に要約する¹⁰⁾。

- (1)2013年12月30日、ヤルカンド県で武装グループが警察署を襲撃した。公安当局は容疑者8人を射殺した模様。
- (2)2014年7月28日、ヤルカンド県で武装グループが政府庁舎や派出所を襲撃した。住民37人が犠牲となる。公安当局は容疑者59人を射殺した模様。
- (3)2015年9月3日、ヤルカンド県で爆発があり、銃声が響いた。公安当局は警戒態勢を敷いたが、詳細は不明。

新疆ウイグル自治区では、住民と政府の間で暴力事件が頻発しているが、中国のメディアで事件の詳細が報じられることは少ない。このようなイスラーム系住民が関与する襲撃事件が発生した場合、政府は「組織的で計画的な重大暴力テロ」と断定し、ウイグル独立派組織「東トルキスタン・イスラム運動」の関与という外部陰謀説を強調するのが一般的であるが、その根拠は示されない。

現地では「女性はベールで顔を覆わないように」「男性はヒゲをたくわえないように」「ラマダン（断食月）期間

中、飲食店は昼間も営業するように」等、政府はイスラームの信仰と生活への介入を強め、住民の感情を逆なでする行為を日常的に行っている。騒乱が発生する理由の一つは、党や政府の差別的な民族政策である。

18. 新疆ウイグル自治区インギサル県の宗教調査

18.1 インギサル県旧市街のモスク

インギサル（英吉沙）県はカシュガル地区に属し、ヤルカンド県の北に位置する。人口は約28万人（2013年）、鉱物資源と野生植物に恵まれ、工芸品としてナイフが有名である。インギサルに関する基本データは『英吉沙県志』[英吉沙県地方志編纂委員会編2003]に掲載されている（ただし筆者未見）。

県中心部の解放北路の近くに代爾瓦孜モスクがあるが、資料未入手のため創建年等の詳細は不明である。筆者は10月25日、金曜午後の礼拝に参加した。モスクには約400人の男性信徒が集まり、集団礼拝を行った。

モスク入り口には、ウイグル人の公安関係者が待機し、「見せる警備」「見せる監視」を行っていた。金曜の集団礼拝は、信徒と公安の間でトラブルが発生することがあるからだ。



図30 代爾瓦孜モスク（インギサル県）と監視カメラ（2013年10月、筆者撮影）



図31 「“五好”宗教活動場所」認定証（インギサル県代爾瓦孜モスク）、（2013年10月、筆者撮影）

18.2 「双五好」運動の展開

図31は代爾瓦孜モスク内に掲げられていた表彰パネルである。左は2003年8月にカシュガル地区民族宗教事務局が認定、右は2002年8月に新疆ウイグル自治区宗教事務局が認定したものである。政府の宗教事務局がいつからこの認定活動を開始したのかは明らかでないが、新疆ウイグル自治区では「宗教事務条例」（2005年3月施行）制定以前の2002年にすでに行われていることが確認できた。

「五好」とは具体的には「法令遵守、民族団結、場所管理、宗教和諧、環境衛生をしっかりと行っている」ことを意味している。「場所管理」とはモスクの民主管理委員会が政府の宗教管理の方針に基づいて、モスクの運営、財務管理、安全管理を行っていることを示す¹⁷⁾。

「五好」に関して、2015年9月現在「双五好」（二つの「五好」）という運動が展開されている。一つは「“五好”宗教活動場所」の認定、もう一つは「“五好”宗教人士」の選出である。

後者の「五好」は、「經典解釈、民族団結、擁護安定、愛疆公德、先導的役割」に優れた宗教指導者を選出し表彰する制度である。

「擁護安定」（原語：維護穩定）とは、「暴力に反対し、法制と秩序を重んじる」という中国共産党の新疆政策「一反両講」（暴力に反対し、法制と秩序を重んじる）を踏まえたものである。「愛疆公德」（原語：文明風尚）は愛國愛疆、經濟發展、公益活動等を重視する態度を養うことである。「先導的役割」（原語：發揮作用）は、中国共産党の民族宗教政策を支持し、法律を遵守し、「三股勢力」（宗教的過激派、民族分裂主義者、国際テロ組織）に反対する姿勢を積極的に示すことである。

以上のことから、新疆ウイグル自治区における「“五好”宗教人士」の顕彰は、中国共産党の宗教政策と新疆政策を体現した政治色の濃い制度であると言える。

19. 新疆ウイグル自治区カシュガル市の宗教調査

19.1 ヘイトガーフモスク

カシュガル（喀什）市は新疆ウイグル自治区南部の中心都市である。区都のウルムチからの距離は約1,500キロメートル、空路を利用すれば2時間で移動可能だ。平均海拔は1,290メートル、人口は約70万（2015年）。

カシュガルを代表するヘイトガーフモスクは旧市街にあり、新疆ウイグル自治区で最大規模のモスクである。15世紀に創建、その後増改築を重ねて現在に至っている。このモスクは新疆に暮らすムスリムの精神的支柱である

とともに、漢人や外国人の観光スポットにもなっている。ムスリム以外の者も入場料を払えば参観可能である。大門の左右には、イスラームの権威を表すミナレット（尖塔）が立っている。

大門前には広大な広場があり、観光客の撮影目的でラクダや馬が準備されている。モスクの周囲には、鍛冶屋、楽器屋、染色屋、銅細工屋、カーペット屋などが並び、都市と農村の生活を支えている。手工業者の保護と育成は、政府の伝統産業維持政策と観光化推進の両面を兼ねている。



図 32 カシュガルのヘイトガーフモスク
(2013年10月、筆者撮影)

19.2 ジュメ・タヒール殺害事件

先に紹介したヤルカンド州政府庁舎襲撃事件から2日後にあたる2014年7月30日、ヘイトガーフモスクのイマーム(imam, アラビア語で指導者)を務めるジュメ・タヒール(1940-2014, 居瑪・塔伊爾大毛拉)が殺害される事件が起こった。政府系の報道サイト「天山網」は、30日朝の礼拝終了後に3人の暴徒がジュメ・タヒールを襲撃し、公安当局は2人を射殺、1人を拘束したと伝えた¹⁹⁾。

重大事件の発生を受けて、中国共産党は素早い対応をとった。まず劉延東(1945-, 中央政治局委員兼國務院副総理)が電話で家族に哀悼の意を伝えた。彼女は党の宗教政策や民族政策を担う中央統一戦線工作部部長(2002年~2007年)の経験者であり、ジュメ・タヒールと面識があったと考えられる。

次に、張春賢(1953-, 新疆ウイグル自治区党委員会書記)が、ジュメ・タヒールは「愛国愛党愛教」の宗教指導者であり、我々は「宗教テロ勢力と断固として戦う」という声明を発表した。



図 33 ジュメ・タヒール殺害事件を報じる新疆衛星テレビ、出典：天山網 2014年7月31日

http://news.ts.cn/content/2014-07/31/content_10275885.htm

ジュメ・タヒールはカシュガル出身のイマームである。宗教指導者のイマームとは、イスラームの諸学問に精通した知識人でもある。その任務は宗教行事のみならず、コミュニティの調整役、政府と地域社会の橋渡し等多方面に及ぶ。

天山網は、ジュメ・タヒールが「“五好”宗教人士」(新疆ウイグル自治区、カシュガル地区、カシュガル市それぞれから選出)であり、第11期全国人民代表大会(日本の国会に相当)の代表や中国イスラーム教協会副会長等の要職を歴任したことを強調した¹⁹⁾。同協会は1953年に設立された政府公認の宗教団体であり、イスラームの振興を図ると同時に、共産党の宗教政策を援助し宣伝する役割も担っている。

この事件の背景として、宗教指導者であるジュメ・タヒールが中国共産党の宗教政策を代弁し、政府の宗教管理に便宜を図ったことが多くのムスリムの反感を買ったからだと言われている。新疆のムスリムは彼の宗教実践の力量を評価しつつも、政府寄りの「愛国イマーム」と呼び見下す者もいる。

イスラームであれ仏教であれ、多くの「“五好”宗教人士」は「愛国」の仮面をはずすことが許されない宗教指導者である。彼らの多くは共産党の宗教政策と政府の宗教管理が過度な引き締めの方角に進まないよう努力を続けているが、一般の信徒はその実情を理解していない。ジュメ・タヒールと殺害犯はともに、政治が宗教を統制し、政治が民族の誇りを傷つける歪んだ社会が生み出した犠牲者なのである。

20. 新疆ウイグル自治区ウルムチ駅北側地区

カシュガルからウルムチへ空路で移動した後、リムジンバスでウルムチの市街へ到着したのは10月27日の深夜であった。ウルムチ駅近くの老舗ホテルに宿をとった際、深夜勤務の従業員から、このホテルにはキルギスやアフガニスタンなど中央アジアから来たムスリム商人が多数滞在していると聞いた。

ウルムチ市の人口は約353万人（2014年）、統計上ウイグルやカザフ等少数民族が占める割合は88%であるが、実際は移住もしくは出稼ぎ目的の漢人が多数流入しているため、市街地では予想以上に漢人の姿を多く見かけた。ウルムチと四川省や甘粛省の都市を結ぶ長距離バスも運行されているが、利用客は観光客ではなく漢人労働者である。こうした季節労働者の一部がウルムチ駅の北側で暮らしていることを筆者はカシュガル滞在中に知った。

翌朝、筆者はウルムチ駅前の広場へ向かった。駅の南側には高架道路が整備され、商業街が広がり賑わいを見せていた。一方、駅北側の狭い土地には粗末なバラックが立ち並んでいた。駅の南側から暗く狭いトンネルを北へ抜けると、貧民街に出た。ここで暮らすのは老人、障害者、鉄道工場の労働者など大半が漢人である。狭い路地には露店や個人商店が軒を連ねている。季節労働者が利用する簡易宿泊所も20件ほど見つかった。

筆者がここへ来た目的は、プロテスタントの布教が行われていることを確認するためである。中国ではプロテスタントの組織が生活困窮者へ物資の支給や地下医療（非合法医療）を展開し、信者を獲得していることは知られている。今回この地区の住人から、プロテスタントの布教活動に関する証言は得られなかったが、つかんだヒントを次回の調査にいかしたい。ただし、ウルムチの深い闇を抱えるこの地区のバラックは、近い将来全面撤去が予想される。

21. 2013年10月28日北京天安門車両炎上事件

筆者がウルムチに滞在した28日の正午頃、北京の天安門付近で、新疆ナンバーの四輪駆動車が長安街の歩道に突っ込み、約400メートル暴走後、橋の欄干に衝突炎上するという事件が発生した。死者は車の中の3人と観光客2人である。毛沢東の肖像が掲げられた天安門及び広場周辺は、中国共産党が厳重に管理する聖域であり、この場所で事件が起こったことは内外に大きな衝撃を与えた。



図34 天安門金水橋付近で炎上する車両
出典：維基百科「天安門金水橋恐怖襲撃案」
<https://zh.wikipedia.org/>

事件から3日後、中国外交部（外務省に相当）の華春瑩報道官（1970—）は2013年10月31日の定例会見で、「組織的計画的なテロ事件である」「東トルキスタン独立勢力は中国を分裂させ、新疆にいわゆる『東トルキスタン国』を設立する目的で長期にわたり分裂活動を行い、国際テロ勢力と結託して中国でテロを繰り返してきた」と述べ、国外勢力の陰謀が引き起こしたテロ事件であると断定した²⁰⁾。

同日、公安部門を統括する孟建柱（1947—、中国共産党中央政法委員会書記、中央政治局委員）は、東トルキスタン・イスラム運動（東突厥斯坦伊斯蘭運動、EMIT=Eastern Turkistan Islamic Movement）の指示が背後にあると指摘し、国際社会と連携してテロ対策を強化すると述べた²¹⁾。

EMITは中華人民共和国からの分離独立を目指す運動組織であり、2002年に国連が、2003年に中国政府がテロ組織と認定した。東トルキスタンは新疆ウイグル自治区に相当し、西トルキスタンはトルクメニスタン、ウズベキスタン、キルギス、カザフスタン、タジキスタンを指している。

中国政府が外部陰謀説をとる目的は、事件は中国政府の失政が原因ではなく、外部組織の策略によるものであることを強調するためだ。そのことにより、中国政府およびウイグル人のメンツを守ることができる。

ここで事件を振り返ると、車に乗っていたのはウイグル人夫婦と母親であることから、外部組織が関与したテロと断定するには無理がある。筆者は今回長距離バスでカシュガル方面へ移動の際、公安のチェックポストで乗客の男性のみが下車し、身分証を読み取り機にかざす場面に遭遇した。チェックポスト設置の目的は乗客の通行記録を収集することである。男性のみが対象ということは、治安当局はウイグルの女性がテロ行為に参加する可能性が低いと判断している。

このことから、天安門への車両突入はこの家族が現政権へ何らかの強い抗議の意思を示したと考えるのが自然であろう。事件の背後には、中国共産党の強圧的な宗教政策と民族政策、漢人や政府に有利な経済政策により、ウイグル人等少数民族の尊厳が冒され、生活が脅かされてきたことへの積年の不満が隠されている。

22. 新疆ウイグル自治区宗教調査

今回、新疆ウイグル自治区にて予備調査を行った際に障壁と感じたことを以下にまとめる。

22.1 言語の問題

区都のウルムチ市街では、ウイグル人を中心とする少数民族と漢語を用いた日常会話は比較的スムーズであった。一方で、自治区南部に位置するカシュガル市、ヤルカンド県、インギサル県では年齢に関係なく漢語能力が低く、漢語話者への嫌悪感もあることから、漢語を用いた日常会話が成立しづらいと感じた。新疆ではウイグル人と漢人の関係は良好ではなく、漢人にウイグルの宗教と文化を尊重する態度は見られない。

筆者はウイグル語を解さないため、漢語を使わざるを得ない。漢語話者が宗教活動という敏感な話題をウイグル人に投げかけても彼らから回答を得ることは難しい。彼らが漢語を話す日本人を漢人と間違えることも避けられない。したがって、調査時にカウンターパートを設定しない筆者が、今後この地域で調査を行う際、言語面で大きな困難に直面することになる。次回の調査では参与観察が中心になるであろう。

22.2 宿泊・交通・身分証の問題

中国では1980年代後半に、中国政府による統一規格の身分証（居民身分証）が発行された。その後、2004年以降 IC チップを埋め込んだ第二世代の身分証に切り替わり、2015年現在旧身分証は失効している。

中国人は宿泊、航空機の利用、列車の切符購入などに身分証の提示が求められる。外国人の場合はパスポートが必要である。一部の地域では長距離バスの切符購入にもこの制度が導入されている（例えば四川省のチベット人居住地区）。このように中国人が中国国内を移動し宿泊する際に、公安当局は身分証を通じて個人の行動をコンピュータ管理することが可能である。道路でナンバープレートを読み取り、先に紹介したチェックポストでの長距離バス乗客の移動確認も含めると、身分証による特定人物の行動管理が可能な時代になった。

2015年現在、外国人がホテルに宿泊する際、ホテル側

はコンピュータにパスポート情報を登録し、公安局に送信することが義務付けられている。このシステムが整備されていないホテルに外国人が宿泊することは原則禁じられている。ただし、実際は地域により事情は異なる。

筆者は二十数年間東チベットで調査を続けてきたが、東チベットに比べて新疆ウイグル自治区の都市部では、外国人が宿泊できる個人経営の宿が少なく、パスポートのコンピュータ管理の方法が異なると感じた。とりわけ宿泊と長距離バス利用時に残る「足跡」を公安当局が一括管理する方法が強化された場合、チベット自治区のみならず新疆ウイグル自治区においても、宗教調査の実施には大きな障壁となる。

【付記】 筆者は本報告の2014年度～2015年度版を現在準備中である。

【謝辞】 本研究は JSPS 科研費 「24510361」「25301037」の助成を受けたものである

【注】

- 1) 「民政部關於同意青海省撤銷玉樹県設立県級玉樹市的批復」（2013年7月3日）、中華人民共和國民政部（2015年8月26日閲覧）。
<http://xxgk.mca.gov.cn/gips/contentSearch?id=47900>
- 2) 「青海省政府確認玉樹地震最終死亡人数為 2698 人」（2010年5月31日）、中国新聞網（2015年8月25日閲覧）。
<http://www.chinanews.com/gn/news/2010/0531/2314359.shtml>
- 3) 鄭漢良「青海結古寺活仏指死亡人数高達一万」（2010年4月20日）、華語 RFI（法国国際廣播電台）（2014年3月30日閲覧）。
<http://www.chinese.rfi.fr/>
- 4) 日本赤十字社「中国・青海省地震復興支援事業の取り組み」（2013年9月）、日本赤十字社（2015年8月25日閲覧）。
http://www.jrc.or.jp/vcms_lf/130925_report_china_yushu_eq.pdf
- 5) 「中国・青海省玉樹県地震」第1報（2010年4月16日）、第2報（4月17日）、第3報（4月18日）、「TMAT 構成員紹介（先遣隊メンバー・事務局）」（2015年8月26日閲覧）。
http://www.tokushukai.jp/syakai_kouken/calamity/result/international/seikai/index.html
特定非営利活動法人 TMAT（Tokushukai Medical

- Assistance Team, 2005年発足)は、各国政府やNGO、地域団体と協力し、医療・災害支援・教育など総合的な医療支援を行っている。TMATの前身は、1995年阪神・淡路大震災を機に発足した徳洲会災害医療救援隊である。
- 6) 2013年8月27日、玉樹州襄謙県香達鎮にてモスクが存在しないことを確認した。
- 7) 「青海玉樹清真寺修復重建工程開工」(2010年9月7日閲覧)。
<http://dev.gansudaily.com.cn/system/2010/09/02/011678406.shtml>
「回望玉樹清真寺」(2010年9月7日閲覧)。
<http://www.qhhsjzh.com/LYZZ/LYZZ/ESE/201009/695.html>
「玉樹地震中穆斯林的葬礼」(2010年9月7日閲覧)。
<http://www.mslgyw.com/?action-viewnews-itemid-4458>
- 8) 「公雅寺現状と発展」(2013年8月19日閲覧)。
<http://www.gongyasi.org/>
- 9) 「自玉樹結古鎮、襄謙県、公雅寺、安尼院」(2012年8月1日掲載)(2015年9月10日閲覧)。
<http://b033874231.blogspot.jp/>
- 10) 「銅色吉祥山——光明蓮師宮殿」(2013年8月19日閲覧)。
<http://www.gongyasi.org/>
- 11) Two abbots of Nangchen monasteries arrested and released after public intervention (2013年12月12日)(2015年9月16日閲覧), Phayul.com.
<http://www.phayul.com/news/article.aspx?id=34347&article=Two+abbots+of+Nangchen+monasteries+arrested+and+released+after+public+intervention>
- 12) 中原一博が提供した資料を以下に掲げる。
- (1) 2013年12月14日「ナンチェン：政治的書物を配布したと生徒4人拘束——高僧2人が拘束されたが住民の抗議」(2015年9月11日閲覧)。
<http://blog.livedoor.jp/rftibet/archives/51812487.html>
- (2) 2013年12月27日「高僧の解放を求めた16人拘束」(2015年9月11日閲覧)。
<http://blog.livedoor.jp/rftibet/archives/2013-12.html>
- (3) 2014年1月4日「拘束されている高僧が『私の解放のためにことを起こすな』と手紙」(2015年9月11日閲覧)。
<http://blog.livedoor.jp/rftibet/archives/51814274.html>
- (4) 2014年1月18日「ウーセル・ブログ『省境を越えて拘束されたケンポ・カルマ・ツェワン』」(2015年9月11日閲覧)。
<http://blog.livedoor.jp/rftibet/archives/2014-01.html>
- (5) 2014年1月17日「高僧等の解放を求め刑務所前で500人が座り込み」(2015年9月11日閲覧)。
<http://blog.livedoor.jp/rftibet/archives/2014-01.html>
- (6) 2014年1月24日「チベット人の移動の自由が奪われていると訴えるケンポ・カルツェ——彼の解放を求める署名活動始まる」(2015年9月11日閲覧)。
<http://blog.livedoor.jp/rftibet/archives/2014-01.html>
- (7) 2014年2月6日「ウーセル・ブログ『逮捕されて47日になるケンポ・カルマ・ツェワンの逮捕1カ月前の記録』」(2015年9月11日閲覧)。
<http://blog.livedoor.jp/rftibet/archives/2014-02.html?p=2>
- (8) 2014年3月13日「ケンポ・カルツェの容態悪化無窓独房にすでに3ヶ月」(2015年9月11日閲覧)。
<http://blog.livedoor.jp/rftibet/archives/2014-03.html?p=2>
- (9) 2014年4月16日「ウーセル・ブログ『ジェクンド地震で救援活動を指導した高僧カルマ・ツェワン師が逮捕されて既に4ヶ月余り』」(2015年9月11日閲覧)。
<http://blog.livedoor.jp/rftibet/archives/2014-04.html>
- (10) 2014年10月17日「ナンチェンの高僧ケンポ・カルツェに2年半の刑」(2015年9月11日閲覧)。
<http://blog.livedoor.jp/rftibet/archives/2014-10.html>
- 13) 「襄謙県住持尕才被判兩年半」(2014年10月20日), RFA自由亞洲電台普通話(2015年9月17日閲覧)。手錠姿の写真が掲載されている。
<http://www.rfa.org/mandarin/yataibaodao/shaoshuminzu/dz-10202014120737.html>
- 14) テンジン・デレク事件については、[川田2015]を参照のこと。その他、詳細な資料がダライ・ラマ法王日本代表部事務所のウェブサイトに掲載されている(2015年9月17日閲覧)。
http://www.tibethouse.jp/news_release/2015/150717_uk_150716.html
- 15) 「西藏四川等五省(区)開展和諧寺廟創建活動」(2012年6月6日), 2013年3月6日閲覧。
http://www.lijiannet.com/2012-06-06/news_12000235571.html
- 16) (1) 金順姫「新疆で武装集団射殺 中国当局、警察署襲撃の8人」『朝日新聞』朝刊, 2013年12月31日。
(2) 金順姫「新疆、襲撃で数十人死傷 容疑者数十人射殺」『朝日新聞』朝刊, 2014年7月30日。
(3) 金順姫「新疆で爆発か 香港の人権団体発表」『朝日新聞』朝刊, 2015年9月4日。

- 17) 「中共烏魯木齊市委員会烏魯木齊市人民政府關於在全市開展“五好”宗教活動場所和“五好”宗教人士創建活動的實施意見」(2014年2月6日), 新疆網(2015年9月18日閲覧).
http://www.xinjiangnet.com.cn/xj/corps/201402/t20140210_3726311.shtml
- 18) 「自治区通報喀什市愛国宗教人士被害案狀況」(2014年7月31日), 天山網(2015年9月20日閲覧).
http://news.ts.cn/content/2014-07/31/content_10275885.htm
- 19) (1) 「新疆愛国宗教人士居瑪・塔伊爾大毛拉生平」(2014年7月31日), 天山網微博・騰訊新聞(2015年9月20日閲覧).
<http://news.qq.com/a/20140731/081832.htm>
- (2) 「第11期全国人民代表大会」全国人大網(2015年9月20日閲覧).
<http://www.npc.gov.cn/delegate/viewDelegate.action?dbid=112644>
- (3) 「中国伊斯蘭教協會」(2015年9月20日閲覧).
<http://www.chinainislam.net.cn/about/xhld/1/>
- 20) 「2013年10月31日外交部發言人華春瑩主持例行記者會」中華人民共和國外交部(2015年9月23日閲覧).
http://www.fmprc.gov.cn/mfa_chn/fyrbt_602243/jzhsl_602247/t1094717.shtml
- 21) 「孟建柱:東伊運是天安門暴力恐怖襲擊事件的幕后指使者」(2013年11月1日), 觀察者(2015年9月26日閲覧).
http://www.guancha.cn/politics/2013_11_01_182567.shtml

【参考文献】

日本語文献

- 岡本亮輔 2015 『聖地巡礼——世界遺産からアニメの舞台まで』中央公論新社
- 川田進 1999a 「玉樹の仏塔」, 『火鍋子』42, 16-17 頁
- 川田進 1999b 「石に刻まれた祈り」, 『火鍋子』43, 2-3 頁
- 川田進 1999c 「草原を襲った大雪害」, 『火鍋子』44, 16-17 頁
- 川田進 1999d 「勇壮華麗な玉樹の舞い」, 『火鍋子』45, 22-23 頁
- 川田進 1999e 「玉樹の街角から」, 『火鍋子』46, 20-21 頁
- 川田進 2000a 「唐蕃古道に残る文成公主廟」, 『火鍋子』47, 2-3 頁
- 川田進 2000b 「鳥葬の丘」, 『火鍋子』48, 16-17 頁
- 川田進 2003 「仏学院と尼僧を襲った党の宗教政策——

- 喇榮五明仏学院の事例から」, 『火鍋子』60, 40-52 頁
- 川田進 2004a 「ヤチェン修行地を覆う神秘のベール——アチュウのカリスマ的支配を探る」, 『火鍋子』62, 44-60 頁
- 川田進 2004b 「五明仏学院事件の検証——法王を失った学院の現状と苦悩」, 『火鍋子』63, 64-78 頁
- 川田進 2005 「ヤチェン修行地に派遣された「工作組」と「慈輝会」——現代中国の宗教空間を探る」, 『火鍋子』66, 76-90 頁
- 川田進 2006 「ヤチェン修行地とインターネット——チベット仏教に見る「新靈性運動」の芽生え」, 『火鍋子』67, 76-88 頁
- 川田進 2007 「色達喇榮寺五明仏学院事件に見る中国共産党の宗教政策」, 『大阪工業大学紀要人文社会篇』51(2), 9-31 頁
- 川田進 2008 「ヤチェン修行地の構造と中国共産党の宗教政策」, 『大阪工業大学紀要人文社会篇』52(2), 25-63 頁
- 川田進 2009 「チベット周縁地域に築かれた宗教空間——『2008年チベット騒乱』と四川省甘孜チベット族自治州を中心に」, 『大阪工業大学紀要人文社会篇』54(1), 13-55 頁
- 川田進 2010 「玉樹に捧げる鎮魂の祈り——ラルン五明仏学院と三人の政府要人」, 『火鍋子』76, 132-145 頁
- 川田進 2012 「中国政府の宗教政策と『公益』活動——チベット系仏学院の震災救援活動を通じて」, 『宗教と社会貢献』2(2), 1-16 頁
- 川田進 2015 『東チベットの宗教空間——中国共産党の宗教政策と社会変容』北海道大学出版会
- 則武海源 2005 「青海省チベット仏教寺院の現状について III ——玉樹チベット族自治州を中心に」, 『大崎學報』161, 69-89 頁

漢語文献

- 阿琼 2011 『玉樹大地震』甘肅民族出版社
- 博巴・倉巴旺蘇主編 1991 『玉樹』青海民族出版社
- 才讓・任宝元主編(発行年不明) 『康巴秘境、江源独秀——囊謙県』青海省囊謙県人民政府
- 国家宗教事務局 2012 「關於全国宗教界開展“宗教政策法規學習月”活動的通知」, 国家宗教事務局政策法规司編『宗教政策法规文件選編』宗教文化出版社, 2012年, 401-404 頁
- 馬福江編著 2010 『影像的記憶——玉樹』青海人民出版社
- 色達・慈誠 2014 『浴火重生——西藏五明仏学院盛衰史

- 録』雪域出版社
- 色達喇榮五明仏学院 2007『心中燃起の時代明灯』色達喇榮五明仏学院（内部刊行物，発行年記載なし，発行年は仏学院高僧に確認）
- 莎車県地方志編纂委員会編 1996『莎車県志』新疆人民出版社
- 索達吉堪布 2001『法王晋美彭措伝』喇榮五明仏学院（内部刊行物，発行年記載なし，発行年は仏学院高僧に確認）
- 王永端 2011『為了巨災後的 183 名玉樹孤児』中国海洋大学出版社
- 新華社総編室編 2010『同人民在一起——青海玉樹抗震救災全記録』新華出版社
- 亜青寺 2000『天鼓妙音——深恩無比大成就者龍朵加参略伝』亜青寺
- 亜青寺 2002『増信妙薬——救護主・成就自在降陽龍朵加参心要略伝』亜青寺（内部刊行物，発行年記載なし，発行年はヤチェン高僧に確認）
- 亜青寺 2009『三信蓮敷妙月 殊勝化身松阿丹増略伝』亜青寺（内部刊行物，発行年記載なし，発行年はヤチェン高僧に確認）
- 冶青林 2011『4.14 玉樹地震影像志』青海民族出版社
- 英吉沙県地方志編纂委員会編 2003『英吉沙県志』新疆人民出版社，筆者未見
- 玉樹県地方志編纂委員会編 2012『玉樹県志』青海民族出版社
- 《玉樹藏族自治州概況》編写組編 1985『玉樹藏族自治州概況』青海民族出版社
- 《玉樹藏族自治州概況》編写組・《玉樹藏族自治州概況》修訂本編写組編 2008『玉樹藏族自治州概況』（修訂本），民族出版社
- 《玉樹州志》編纂委員会編 2005『玉樹州志』（上下）三秦出版社
- 張愛軍主編 2010『青海省政法系統玉樹 4.14 抗震救災攝影紀実』中共青海省委政法委員会・青海省社会治安综合治理委員会辦公室
- 鄧振璞編著 2010『玉樹哈達——獻給救援“4・14”大地震的人們』人民日報出版社
- 中共青海省委宣传部編 2010『永不放棄——同玉樹在一起』四川民族出版社
- 中共玉樹州委宣传部・玉樹州文化体育廣播電視局編 2010『危難時刻——4.14 玉樹大地震通訊報道集』青海民族出版社
- 中国新聞社編 2011『玉樹震撼——中国新聞社青藏高原抗震救災紀実』五洲伝播出版社